



発行所  
 カトリック福江教会  
 広報委員会  
 五島市末広町 3-6  
 ☎ 0959 (72) 3957  
 ●ホームページ●  
<http://fukuechurch.jimdo.com>

# 憐れむ

主任司祭 中村 満



共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)の中で「憐れむ」と日本語に訳されたギリシヤ語は、エレエーオーとスプランクニゾマイがあるが、主語が人間などの場合はエレエーオーを、神やイエス様の場合はスプランクニゾマイを主に使用している。スプランクニゾマイは共観福音書の中では十二回使われ、「憐れむ・憐れに思う・かわいそう」と訳されている。スプランクニゾマイは、スプランクノン(はらわた・内臓)という名詞を動詞化したもの。スプランクニゾマイ「憐れむ」の語の持つ内容は意味深い。日本語の響きとしては、かわいそうなので哀れむ(憐れむ)の意が強いが、本来は、はらわたが動

くような心の動き、共感の動きを指していると言われ、目の前の人間に共感し、愛が心底から自然にあふれ出て行く様を言い当てている。神は、イエス様は、はらわたが動くほどに私達と向き合って下さっている。以下に紹介する十二箇所を、福音書を開き一度は読み、味わって欲しい。

## ■マタイ

(以下の日本語訳はフランシスコ会聖書研究所訳・2011年による)

1. (9・35-38 飼いのいない羊)
- 9・36 また、イエスは、群衆が牧者のいない羊の群れのように疲れ果て、倒れているのを見て、憐れに思われた。

2. (14・13-21 パンを増やす)
- 14・14 イエスは舟を降りると、大勢の群衆を見て、憐れに思い、その中にいた病人たちを癒された。
3. (15・32-39 パンを増やす)
- 15・32 イエスは弟子たちを呼び寄せて仰せになった、「この群衆がかわいそうだ。もうすでに三日間、わたしとともに過ごし、食べる物を持っていない。空腹のまま帰すのは忍びない。途中で倒れるかもしれない」。
4. (18・21-35 赦し)
- 18・27 そこで、その僕の主人は憐れに思つて、彼を赦し、借金を免じてやった。
5. (20・29-34 二人の目の不自由な人の治癒)
- 20・34 イエスは憐れに思い、その目にお触れになった。すると、彼らはたちまち見えるようになり、イエスに従った。

- エスは大勢の群衆をご覧になり、牧者のいない羊のようなそのありさまを、憐れに思い、いろいろと教え始められた。
3. (8・1-10 パンを増やす)
- 8・2 「この群衆がかわいそうだ。もうすでに三日間わたしと一緒に過ごし、今、食べる物を何も持っていない」。
4. (9・14-29 悪霊につかれた子)
- 9・22 「霊はこの子を殺そうとして、しばしば火や水の中に投げ入れました。できますなら、どうかわたしたちを憐れんで、お助けください」。

## ■ルカ

1. (7・11-17 ナインのやもめの息子)
- 7・13 主はこの婦人を見て憐れに思い、「泣くことはない」と仰せになった。
2. (10・25-37 善きサマリア人)
- 10・33 ところが、旅をしていた一人のサマリア人が、その人のそばに来て、その人を見ると憐れに思い、
3. (15・11-32 放蕩息子)
- 15・20 そこで、彼は立って父のもとへと行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父は息子を見つげ憐れに思い、走り寄って首を抱き、口づけを浴びせた。
2. (6・30-44 パンを増やす)
- 6・34 さて、舟を降りると、イ

## 希望を捨てず

助任司祭 西田祐尚



この原稿を認めている今（八月十八日）、一週間ほど続いた豪雨が少しずつ落ち着きを見せ始め、日によっては晴れとなる日が出てきました。豪雨中、五島市や長崎市などには避難指示が出され、皆様の中には大変ご苦労された方々もいらっしやるかと思えます。お察しいたします。

この豪雨災害もそうですが、やはり新型コロナウイルスは私たちの頭を悩ませます。デルタ株が日本全国で蔓延し続け、つい最近のニュースではラムダ株も南米の方で確認されたとのことでした。この状況にあって、いつになったら、この苦しみから解放されるのか。「主よ、この私を救ってください」（詩編 70・2）というダビデの祈りが私たちの心の中で繰り返されます。

さて、話はいぶ変わりますが、私自身、司祭叙階を受けて、また、福江に赴任して半年近くが経ちました。司祭となって感じることに、一番の喜びは、皆さんと共に「ミサができることです。しかし、五月も、八月もほぼ一カ月近く、コロナでミサがお休みとなり、司祭としての生

き甲斐が奪われている気がします。ですが、考えてみると皆で共に「ミサに与る喜びは何も司祭だけではなく、皆様も同じであると思います。」皆で一緒に「ミサに与りたい。」その気持ちには、私たちキリスト信者すべての生き甲斐なんだということなのです。

先の見えない状況、自分も感染するのではという不安、自分のことだけではなく、家族にも危険が及ぶのではという恐怖、そういったものも皆が抱えているものです。私は、見てわかる通り、細菌学の研究者ではないので、コロナの終息の時期についてはわかりません。政治家でもないので、どうすれば、こんな状況の中にあっても苦しむ人がいなくなるかなどわかりません（善策はあっても正答はないように感じます）。ただ、端くれの司祭である私にできることと言えば、祈ることと、感染対策を徹底しながら日々を生きることです。キリストが死んで復活したように、そして、弟子たちも師であるキリストの死の悲しみと復活の喜び、希望を抱いたように、私たち人間は必ず悲しみ、苦しみの先には喜びがあります。また、皆さんと心を合わせて共に「ミサを捧げる喜びの時、それが当たり前になる日を望みながら、福江の司祭館から日々祈っている」と思っています。希望を捨てず、希

望を持ち続けましょう。

皆様、コロナに感染することのないように祈りながら……

## 青年会の紹介

助任司祭 稲田祐馬

青年会は現在、八名のメンバー（内二名は日本語を学びに来ているベトナム人の青年）で構成されています。コロナ禍でまだ全員がそろったことはありませんが、集えるメンバーで活動しています。月に一度、土曜日の晩ミサ後に信徒会館に集まっています。なにか、教会のために活動することできるか話し合っているとこで、朗読などの典札奉仕や、あるいは教会玄関の掲示板の充実などが挙げられているところです。

青年たちの姿を見るのは嬉しく、それも「ミサに来ておしまいではなく、こうして集い、交わえる場所があるのはとても喜ばしいことだと思っています。もっともっと輪が広がってほしいなと思います。

青年会をどのように運営していくか、青年たちもシスターも司祭も頭をひねっているところでありますが、フランシスコ教皇様の使徒的勸告『キリストは生きています』（若者をテーマにしたシノドス…世界代表

者会議を受けて出されたもの）では、「青少年司牧の主役は若者だ」と強調されています。わたしたちは若者たちに対して、良かれと思って、あーせい、こうせい、と言ってしまいがちですが、「若者たちが自由に動ける場」が青年会なのです。若者たちへの信頼が重要です。慣れるまでは、ガイドが必要になるかもしれませんが、いずれは青年たちが自分たちで自由に運営していつてくれたらなと思います。そのためバックアップは司祭もシスターも惜しみません。そして、そのような活動の中で、イエス様との出会いを感じてほしいなと思います。イエス様との出会いは教え込まれるものではなく、体験です。ともに神を信じる仲間との交わりを通して今なお生きておられるキリストに出会い得られたもの、その味わいを深める手立てを教会は持っています。いまは集いの最後に活動の振り返りを分かち合っています（強制ではない、言いたくなかったら言わなくてもいい）、いずれはみことばを用いての分かち合いとか、そういうのもできたらいいなと思います。集いの予定は教会のお知らせに掲載するようにしています。司祭に直接問い合わせなくてもかまいません。若者のみなさん、とりま来てみませんか？

こころ

# ばっくなんばー

広報誌「こころ」の過去の記事を紹介する「ばっくなんばー」のコーナー。今回は第二四号（昭和五二年八月発行）より、信徒 K・Z 様の御祖父様が受けた迫害の体験談です。

## 在りし日のおじいさんの思い出

「何事もないから舟を着けなさい。」の言葉を信用して上陸し、六人全員共に捕らえられたおじいさん達。

舟は長さが六尋もあり、まだ新造舟だったが異教徒に押取られ、身には縄を打たれて友住郷に曳き行かれ、そこで改心を迫られたが一人も応じなかったので、算木責めと言って三角に削った三本の木の上に坐らせられ、膝の上には角石をアゴのところまで積まれたけれども、一人も口を開かなかつたので、甚くむち打たれた上で、大雪の降る中を有川へ送られたとのこと。五島キリシタン史には和助と三吉だけがちよんまげを二人一つに括り合わされたように書かれています。おじいさんの話では六人全員が、二人ずつちよんまげを一つに括り合わされて歩かされたので、顔が引きつられてとても苦しかったとのことでした。

有川の町に入ると、道の両側に大

勢の異教徒が見物に出てきて、皆手をたいてあざ笑い、また後ろから不意に突き倒されて、自分達がバタバタするのを見て大笑いされたものでした。有川での牢屋住まいは一週間だったが、食べ物は一日に小さいイモを三個しか与えられなかったらしく、まだ青年だった彼等は、極度の飢餓の苦しみにあわされたようです。それから下五島に送られ、福江の牢獄に繋がれ、冷たい鉄窓の月を眺めることになったのですが、福江地区は上五島より責苦が幾らか易しかったこともあり、その中に迫害も次第に下火となり、遂に明治六年、明治天皇は禁教令を解き、信教の自由が發布され、迫害も終わりを告げたので、全員放免となったのです。

おじいさんは至って律儀な人でお祈りの時は勿論、食事の時もきちんと膝立の姿勢で、足を崩したことがなく、よくロザリオを誦（なぞ）っていました。最後の秘蹟は、水ノ浦教会の当時の主任司祭青木神父様をお迎えました。老衰し、また病のために体は瘦せ衰えていましたが、頭は最後まで確かなもので、私に話しかけて、「神父様が、聖父と聖子と聖霊を忘れるな、と言った。」と言って、うれしそうに顔を語りかけ度々十字架の印をしながら、聖名を誦（なぞ）っていました。私はおじいさんが息を引き取る

まで枕辺にいましたので、おじいさんを励まして言いました。「おじいさん苦しい迫害をよく堪え忍び殉教を覚悟して、最後まで教えを棄てなかつたから、天様は今日、おじいちゃんに天国の幸福を与えて下さいます。おじいちゃんと分かれるのは悲しいが、おじいちゃんの為には幸せだ。」と言ったら、「おーきに」と言い、「長

## ただいま工事中

福江教会敷地外周のブロック塀改修工事を七月より開始しています。初めの一か月で老朽化したブロック塀の撤去を行い、現在は新しいフェンスの設置工事中です。合わせて、敷地減少に伴い取り壊したトイレの新設工事も行っており、工事終了予定は本年末となっております。なお、教会横に現在仮設している倉庫については、今年度内に新設される予定です。

工事期間中、車で教会にお越しの際は敷地外道路への見通しが悪くなる場合があります。また、車の出入りには十分ご



敷地外周塀改修工事の様子



写真左のトイレを男性用に改修し、重機のある位置に女性トイレと多目的トイレを増築します

注意下さい。

中村神父様より文書にてお知らせ・お願いがありました通り、昨年より改修委員会により工事内容を検討し見積もりを行った際の工事費が、その後の世界的な建設資材の高騰の影響により、当初予定されていた金額を大きく超えてしまいました。工事業者様の協力により、資材の一括購入や輸送費等を抑える努力をして頂きました。建設費の増加分について信徒の皆様にご寄付をお願いせざるを得なくなっています。何卒ご理解とご協力のほどお願いします！

い間、大事にされて有難う。」と感謝の言葉を述べ、「自分の為にお祈りするように。」と言ってから、静かに天国に召されたのです。誠にうらやましい、美しい最後であったことが深く心の中に残っています。

おじいさんの一生は、私達に多大の教訓を与え、殉教的精神を示してくれたのです。

# 西田神父様 霊名のお祝い



六月十三日(日)二番ミサにて、パドアの聖アントニオ西田祐尚神父様の霊名のお祝い式が行われた。子供代表よりお祝いの言葉があった後、花束と霊的花束が贈られた。

西田神父様よりお礼の言葉として「こうやって霊名の祝日をお祝いしてもらっていると、祝う側から祝われる側となり『あー神父になったんだ。』と今さらながら思いました。まだまだ未熟者なのに、本当にありがたいです。」「パドアの聖アントニオは、無くし物の聖人と呼ばれたり、有名な説教家だったと言われています。パドアの聖アントニオの背中を追いながら、みなさんの力になれるような、行く末の見えない不安な人の力になれるような人になっていきたいと思えます。これか

らもよろしくお願ひします。」と述べられた。

西田神父様、コロナ禍での司牧は信徒と思ひ通りに関われなくてもどかしい面もあるかもしれませんが、今の初々しさと若い情熱を武器に頑張ってください！

## パドアの聖アントニオとは

パドアの聖アントニオは、一九一五年ポルトガルのリスボンに生まれた。十五歳のとき、神に献身を願ひアウグスチノ会に入会した。司祭となったが、二五歳のときコインブラでフランシスコ会殉教者の遺骨の前に黙想し、アフリカ宣教への熱い望みを抱くようになり、フランシスコ会に移ることを許された。翌年、殉教の覚悟でモロッコに渡ったが、まもなく病気になるイタリヤに帰された。

一二二二年、イタリヤ北部フォルリ市で修道士として暮らしていた彼は、ある日、新司祭祝賀の席上、はからずも長上から説教を命じられた。そこで聖霊に満たされて人々の心を動かす話をした。これを機に「生ける福音」を語る説教家として管区長から巡回説教師に任せられ、イタリヤやフランスを巡って福音を伝え、無数の人々を回心に導いた。

一二三一年六月一三日、三六歳の若さで亡くなり、その遺骸はイタリヤのパドアの聖堂に安置、死後一年を経ずに列聖された。その墓では数多くの奇跡が起こったと言われている。

(カトリック河原町教会  
公式ウェブサイトより一部引用)



## パンデミックを契機に

全世界を不安に陥れている新型コロナウイルスの流行は、五島市内でも感染者が確認されたため、八月初旬からミサの休止が今(八月末)も継続中である。ワクチン接種は進行しているものの希望者に行き渡るまでには至っておらず、また完全な感染抑制効果があるわけではないためマスク生活は変わりなく続いているし、いつ終わるか誰にも分からない状況である。しかし、ワクチン接種により感染しても重症化を抑制する

効果があることは確認されているため、近い将来の終息を期待して自粛生活を続けている人も多いかと思う。さて、今回のパンデミックによって感染を恐れて人と人の距離が離れてしまい、心と心の距離まで離れていると感じる。信徒間でも、聖母祭など行事の中止が相次いで交流が断たれてしまい、寂しい気持ちで日々過ごしている方も多いかと思う。

慢性的に続く感染への不安にコミュニケーションの低下が加わると、精神的な落ち込みにつながりやすく注意が必要だろう。独居の方や孤立しがちな職業の方など、他者との会話の機会が少ない方に対して、感染に配慮しながら(距離をとる、短時間を意識する)声掛けをしたりの関りを持つように努めたい。

実は、こういった問題はコロナ禍になる前からそれなりにあったことで、将来パンデミックが終息しても孤独を抱えた人、周りから理解をされないと感じている人は居続けるだろう。パンデミックを契機にこういった思いの方々が元気になれるよう、まずは身近な人で気になる人がいたら電話してみたり、仕事の合間に声をかけてみたりしてはどうだろうか。

(N・H)